

太平洋戦争末期、
えなみ まつほ
榎列村・松帆村の村長は突然
陸軍に呼び出され、当地での
飛行場建設を知らされました

軍によって、松帆から
榎列にかけて農地や家が
一切の異議を許されず、
買収されました。
軍事機密のため、人々は
飛行場と言うのも恐れ
まるまる
「〇〇」と呼びました。



かみはだ いちだ
上幡多や櫟田から山土を運ぶための
レールが敷かれ、毎日千人規模の
兵隊や地元の学生・婦人会が動員
されました。
人海戦術での建設作業が進められ、
近隣の村には作業員が溢れました。



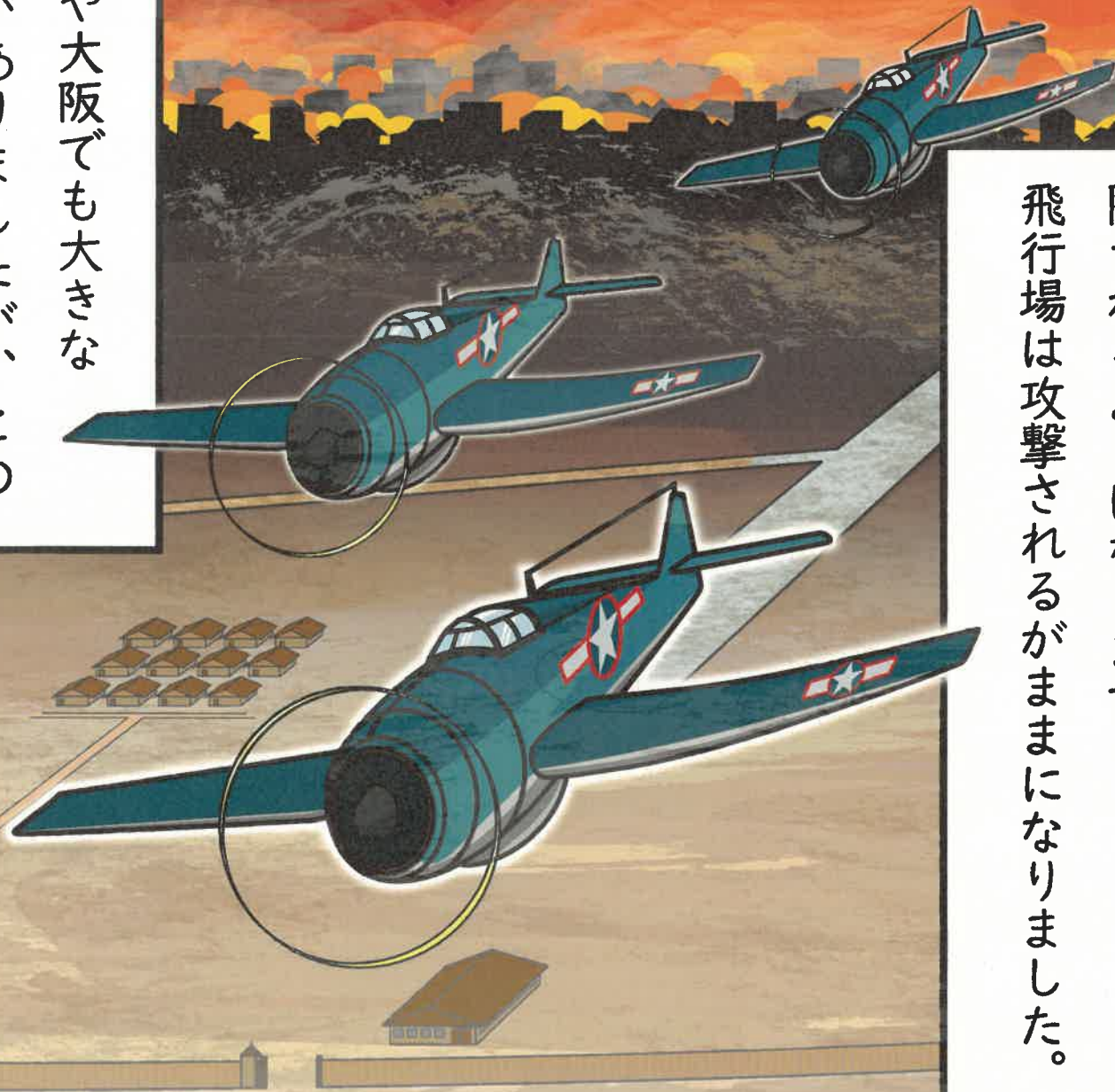
戦争で男手の無い中、一か月で
女性や高齢者だけでの家の
解体移築、引っ越し作業は
大変な苦難でした。

半年後、一部の滑走路・格納庫・兵舎などが完成しました。

しかしこの頃には日本の制空権は米軍に奪われ、戦闘機は山影や河原の木陰に隠されるようになります。

飛行場は攻撃されるがままになりました。

神戸や大阪でも大きな空襲がありました。この飛行場は全く役に立つことができませんでした。



今も飛行場を囲んだ堀や、
堀を埋めた道路が当時の
面影を残しています。

兵舎
(松帆国民学校)

現存する堀

60m

トロツコ列車

輸送通路

格納庫
(飛行場内から
山影へ移動)

1500m

未完成
滑走路

トロツコ列車

戦後、元の土地所有者達が
飛行場の土地解放を求め、
返還後は滑走路のコンク
リートが剥がして元の農地へ
と戻していきました。